



Title	J.E. シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォ クレス」：受容の2つの局面から考える詩学史の物語 論的再解釈
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2017, 14, p. 55-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

J. E. シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォクレス」

－受容の2つの局面から考える詩学史の物語論的再解釈－

福 田 覚

啓蒙主義時代の詩学の歴史を、物語という概念を意識して再解釈すると、どういうことになるのだろうか。本稿は、このいささか思弁的な問いに対する考察の覚え書きである。

ある一面では、人の思考枠組みとしての物語が問題になり、詩学史に登場する人物たちが啓蒙主義時代にどのような物語を思い描いて思考し行動していたのか、詩学史の流れのなかで過去にどのような物語が支配的であったのか、それを再構築することが詩学史記述の課題となるだろうか。喩えて言えば、談話的療法の療法家のように、クライアントの話に耳を傾ける代わりに丹念に文献資料を追い、出来事の背後に当時の人の意識にある物語の筋を読んでいこうとすることが詩学史を記述する者の課題となるのだろうか。

しかし、歴史を語ることの物語性もまた同時に問題となり、現代から詩学史を記述し直すときには、それがまたどのような物語で語られるのか、我々の思考枠組みとしてそこに介在する物語、我々が確認された事実を流し込んで整合的に理解を整えようとするときに創り出している物語にも反省的に意識を向けなければならないと思われる。たとえば、当時の言説として、現状の改革や古い世代の乗り越えは常に語られているが、時代を隔てた我々がそれを額面通りに受け取って無批判に進歩史観に立ってよいものか考えさせられる。

また別の一面では、詩学に固有の理論装置の次元に焦点を当て、過去の詩学の理論的な枠組みや命題などを現代の物語論的な発想で捉え直すこともまた、「物語論的再解釈」になるものと考えられる。つまり、当時の詩学の観念を今日の言葉遣いで言い換えて相対化して、現代の物語概念の考え方で捉え返すとどうなるのかを思量することも、視野に入ってくる。管見によれば、我々は物語について、その生成論や変容論や関係論を考察することが可能であり、過去の詩学的な議論のなかにそれに類する思考形態を事後的に認めることもおそらく可能である。

「詩学史の物語論的再解釈」というこうした総合的な性格をもつ研究を進めていくための思索として、本稿では、考察の素材に、ライブツィヒの啓蒙主義におけるソフォクレスの受容について、断片的にはあるが、2つの局面を取り上げたい。17世紀から18世紀にかけて、主に初めてソフォクレスの悲劇作品が訳された流れを概観したのちに、ヨハン・エリアス・シュレーゲルが『エレクトラ』を訳した時期をめぐる問題と、ゴットシェートが『批判的詩論』で示している『オイディプス王』の解釈の問題を取り上げる。ヨハン・エリアス・シュレーゲルの翻訳の印刷が遅れたという事実から間接的に浮かび上がる幾つかの思考のなかの物語と、ゴットシェートが悲劇を道徳的に解釈するということから窺える、物語の関係論とでも言うべき

思考形式の特性について考えることで、「詩学史の物語論的再解釈」というテーマについて今後の作業仮説や作業感覚を得るための準備的な考察（コンセプトワーク）としたい。

1. 翻訳によるソフォクレスの受容ー17世紀前半と18世紀中葉の動き

18世紀のライプツィヒでのソフォクレス受容を断片的に見てみる前に、助走として、ソフォクレスの悲劇作品がドイツ語に翻訳される流れを概観しておくことは、一つの足掛かりになると思われる。ゴットシェートが力を発揮したライプツィヒのドイツ語協会と関わりが深かった雑誌『批判的論叢』に目を向けてみると、1734年の第3巻第10号に、古代ギリシア作家の作品に関して、それまでになされたドイツ語訳に関する報告というものが載せられている¹。ただし、掲載されている翻訳のリストは完全なものではないと断られている²。その趣旨については、ギリシア語に関わるドイツ人の功績は、言語について認識するのにも学識を広げるのにも利用できる立派なものなので、それを幾つか紹介することはきっと読者にとって喜ばしいことだろう、と述べられている³。ソフォクレスに関しては、この時点では、『アイアス』と『アンティゴネー』について記載が見られるだけである⁴。参考のために後の時代のS. F. W. ホフマンの『全ギリシア文学書誌事典』(1845)を参照しても同様に、1740年よりも前のドイツ語訳は、この2作品の17世紀前半のドイツ語訳が1件ずつ確認されるのみである⁵。

それらの記述によると、『アイアス』のドイツ語訳というのは1608年8月に出版されたものである⁶。長いタイトルの表記によれば、スカリジェルのラテン語訳をもとにして多少の補足を加えたものが1587年7月にストラスブールで上演されたのち、新たに脚色を加え増補されたものが1608年に同地で上演されていて、その時のドイツ語訳である。つまり、スカリジェルのラテン語訳をさらにドイツ語に訳したものである。訳者は、出版物の表記ではM. W. S. M. となっているが、これは今ではヴォールファールト・シュパンゲンベルク(1567-1636)だと了解されている⁷。劇のテキストは押韻されている。翻訳というカテゴリーに入れられてはいるが、精確な翻訳ではなくて、当時の趣味に従った脚色作品である。『批判的論叢』第10号の解説は、ソフォクレスの悲劇に比べて、かなり分量が増えていることを細かく指摘している。この訳者は出来事の前後の状況まで芝居に持ち込み、観客に念入りに説明しようとしすぎて、却って演劇の規則に反することになってしまっている、と述べられている⁸。

2件のうちのもう1つ、『アンティゴネー』のドイツ語訳は、1646年12月にアムステルダムで出版されたオーピッツの詩的作品集第1巻に収められたものである⁹。『批判的論叢』第10号は、それについての説明のなかで、1636年にプロイセンの街、トルンで訳されたものだと記している。この翻訳のラテン語による献辞の末尾に「トルン(Thorun)」、「1636年(MDCXXXVI)」という地名と年号が見られる¹⁰。ただし、『批判的論叢』第10号でも『全ギリシア文学書誌事典』でも触れられていないが、すでに1636年に、オーピッツのこのドイツ語訳はダンツィヒで印刷されている¹¹。

それからさらに時代が下った 18 世紀におけるギリシア悲劇作家の受容は、キッツビヒラーが記すところによれば¹²、ギリシア語での出版のほか、英訳、仏訳、独訳のテキストが流通することで進んでいった。英訳と仏訳が比較的多く、とりわけ 1730 年に出されたブリュモワ師の『ギリシア演劇』¹³は大きな影響力をもち、ドイツでも広範囲で知られていた。それに対して、ドイツ語訳は比較的少なかった。

18 世紀になるまでソフォクレスのドイツ語訳があまり見られなかった理由について、ハンズ・フライは、需要がなかったと明快に書いていた。教養層はラテン語を話し、宮廷ではフランス語が話される。宮廷や教養層以外にはソフォクレスに対する関心は乏しく、ソフォクレスを大衆に広めようとする者もない。たしかに、ギリシア語の知識は教養層にもそれほど広がっておらず、宮廷ではほぼ知られていないが、ラテン語とフランス語の翻訳で十分な状況であった。フランス語訳は大いに広まっており、また、ソフォクレスのラテン語訳はドイツ語圏でも刊行されていた。他の近代語では、ソフォクレスはすでに 16 世紀（英語、イタリア語）と 17 世紀（フランス語、オランダ語）に訳されていた¹⁴。

先に参照した雑誌『批判的論叢』は 1744 年の 32 号で終結するのだが、その後の時代になって、1747 年からソフォクレスの他の作品のドイツ語訳も刊行されるようになる。個々の作品の初訳を『全ギリシア文学書誌事典』に拠るかたちで整理すれば、まず、『エレクトラ』のドイツ語訳が 1747 年のヨハン・エリアス・シュレーゲル（1719-49）の『演劇作品集』に収められることになる¹⁵。『アイアス』は、先に触れた 17 世紀のシュパンゲンベルクによる翻案以降のものとしては、1757 年にクリスティアン・トビアス・ダム（1699-1778）によるドイツ語訳がベルリンで出版されている。ただし、この出版は匿名でなされている¹⁶。

『オイディプス王』は、ヨハン・ヤーコブ・シュタインブリュッヒエル（1729-96）によるドイツ語訳が 1759 年にチューリッヒで出版される¹⁷。シュタインブリュッヒエルは、同じ年に『エレクトラ』、翌 1760 年に『アンティゴネー』、『フィロクテテス』の独訳もチューリッヒで印刷していて¹⁸、1763 年にそれらを収めたギリシア悲劇のソフォクレスの巻が刊行されることになる¹⁹。この訳者はスイスの文献学者で、1763 年にチューリッヒで大学教授となっている。フライによれば、ギリシア語に関してはこの時代の傑出した識者で、たくさんの書き込みのあるソフォクレスのテキストがチューリッヒ中央図書館に保管されている²⁰。

『コロヌスのオイディプス』と『トラキニアイ』は、オイスタヒウス・モーリッツ・ゴルトハーゲン（1735-83）によって、それぞれ 1769 年と 1777 年にドイツ語に訳されている²¹。

また、『オイディプス王』に関しては、カール・ヴィルヘルム・ラムラー（1725-98）がバトゥーの詩学書を訳した時に、1756 年の第 2 巻において、『オイディプス王』の梗概を紹介しバトゥーの解釈を示した部分で、悲劇の一部をドイツ語に訳すことが生じている²²。

こうして概観すると、18 世紀の半ばという時代に、ソフォクレスのドイツ語への翻訳という面で一つの大きな転換期が形成されていたことが窺い知れる。しかし、これだけでは、この背後にある物語群はまだよく見えてこない。

2. J.E. シュレーゲルの『エレクトラ』翻訳の時期をめぐって

—ゴットシェートと関わったライプツィヒ時代

上に挙げたなかでヨハン・エリ阿斯・シュレーゲルによる『エレクトラ』の翻訳に関しては、実際に訳されたのは、1747年よりもさらに早かったことが分かっている。シュレーゲルの『演劇作品集』の前書きの最後に「1747年4月8日」という日付が見られるが²³、前書きの文章で、この作品集のなかの『エレクトラ』の翻訳は5年以上も前に完成していて、長く自分の手を離れていたということが述べられている。

「これをさらに力強いものにするために、ソフォクレスの『エレクトラ』の翻訳をこの書の4番目の作品として読者の皆さんに提供できるのは、歓迎すべきことです。この作品は、すでに5年以上前に完成していたのですが、私の手を離れていたために、改めて再度見直すことができませんでした。」²⁴

この「5年以上前」というのは、ゴットシェートによる『ドイツの演劇舞台』(Die Deutsche Schaubühne)²⁵という刊行物に関係している。『ドイツの演劇舞台』は、1741年から1745年にかけて出版された、6部に分かれた演劇作品集で、ゴットシェートが取り組んできたドイツ演劇の改善やそれがもたらした良き趣味がいつそう定着するように考えて企画されたものである。1740年の『批判的論叢』第6巻24号の最後に、「印刷中の『ドイツの演劇舞台』についての報告」という文章があり、そうした企図が述べられている²⁶。その文章が予告的に紹介する第1部の内容には、ソフォクレスの『オイディプス』と『エレクトラ』が含まれることになり、それらがドイツ語に訳される、ということが書かれている。

「第1部に収められる予定なのは、1)アリストテレスの詩論。そこには、真の演劇的詩作品の適切な原則が含まれている。ドイツ語に訳され、ゴットシェート教授による注解が付される。2)ソフォクレスのいくつかの悲劇。すなわち、アリストテレスが常に引き合いに出していたオイディプスとエレクトラ。同様にドイツ語に訳される。そこから、古代ギリシアの演劇舞台のあり方について完全な理解を学べるであろう。」²⁷

同じ予告によれば、第2部には、悲劇と喜劇が交互に楽しめるように3篇ずつ収められ、大半がフランス語から訳したものになるという。6作品の具体的な名前が挙げられている。第3部以降についてはそれほど具体的な言及はないが、悲劇3篇と喜劇3篇という、第2部と同じ構成になる予定とされている²⁸。

その後の実際に刊行された『ドイツの演劇舞台』を見てみると、第2部は『批判的論叢』で予告された通りの作品が6篇収められている²⁹。第3部以降も、厳密に悲劇3篇と喜劇3篇が交互に並ぶ構成でなくても、それに近いものとなっている³⁰。しかし、第1部は予告とは大きく異

なり、フランス語などから訳された悲劇3篇と喜劇4篇が収められていて、第2部以降とむしろ釣り合った内容となっている³¹。この第1部の内容変更は、フランス演劇を経由しない古代ギリシアへの直接的な傾倒が大きく薄まったような印象を与える。刊行順も異例で、第2部と第3部が先に1741年に刊行され、第1部は1742年に刊行されている。その後の第4部から第6部の刊行は、1743年から1年毎である。因みに、第4部には悲劇「ヘルマン (Herrmann)」と喜劇「忙しげな不精者 (Der geschäftige Müßiggänger)」、第5部には悲劇「ディード (Dido)」という3篇のヨハン・エリアス・シュレーゲルの作品が収められている。

当初の予定では『ドイツの演劇舞台』第1部に収められるはずであった『エレクトラ』の翻訳というのは、まさにヨハン・エリアス・シュレーゲルに拠るものであったことが、ゴットシェート宛のシュレーゲルの書簡から見て取れる。書簡には、このように書かれている。

「私の仕事のうちから選んで、僅かながらですが、幾つかの新しい演劇作品を近々公表するつもりです。私が訳したソフォクレスのエレクトラの翻訳ですが、それがあなたの手によって印刷されるという期待については、もうすでにしばらく前から、すっかり諦めております。とりわけあなたが、約束されたアリストテレスの詩論について沈黙なさっていることは、その計画をもはや顧みておられないものと推論せざるを得ません。そういうわけで、その原稿を、私が受け取ったものを返送いたしますのと引き替えに、枢密官房書記官のヴァーグナー氏にお送り下さるようお願いしたとしても、反対はなさらないものと存じます。さすれば、ヴァーグナー氏はそれを私に届けてくれましょう。」³²

この書簡の日付は、「1746年9月20日 (den 20. Sept. 1746)」となっている。ダンツェルは「1747年9月30日 (den 30. Sept. 1747)」と書いているが、『演劇作品集』の前書きの日付が1747年4月8日であることを考えると、それより後というのは考えづらいのではないだろうか³³。また、これは、アントニーヴィチが指摘していたことだが、1747年9月18日付けでシュレーゲルからボドマーに宛てた書簡のなかに、『演劇作品集』に収められた『秘密に満ちた男 (Der Geheimnißvolle)』の評判のことが書かれている³⁴。これが出版されたものを読んでの意見であれば、ダンツェルが記しているように1747年の9月30日に翻訳原稿の返却を求めるということはないと思われる。また、これも、アントニーヴィチが書いているように、1746年10月8日のボドマー宛て書簡に、『エレクトラ』の翻訳をゴットシェート教授から返してもらうよう試みた、ということが記されている³⁵。先に引用したゴットシェート宛の書簡も、この書簡よりも少し前に出された同じ年の秋の書簡と考えるのが自然である。

『ドイツの演劇舞台』の第1部が1742年に遅れて刊行された時、ゴットシェートはその「前書き」のなかで、予告とは全く異なる内容になったことについて釈明している。そこでは、アリストテレスの詩論の翻訳は自分の手によってとうの昔にできていて、『オイディプス王』と『エレクトラ』の翻訳も、自身は他の仕事が山積しているので信頼できる二人の人物に託してすでに出来上がっているが、アリストテレス詩学に対する自身の解説と注解が去年も今年も完成で

きなかった、という意味のことが述べられている³⁶。この第1部の前書きは1742年の新年に記すと最後に書かれているので³⁷、ヨハン・エリアス・シュレーゲルが1746年9月に「5年以上前」とした『エレクトラ』の翻訳時期は1741年と見てよさそうである。

ただし、これと整合しない報告もある。弟のヨハン・ハインリッヒ・シュレーゲルが早くに亡くなった兄の『作品集』を編むことになるのだが、その第1巻（1761年）に再び収められた『エレクトラ』の翻訳の前書き（Vorbericht）で、翻訳の完成は印刷の8年以上前だったと書いているのである。つまり、その言葉通りだとすると、最初に印刷に付された1747年の『演劇作品集』の8年以上前、1739年か、あるいは1738年には訳されていたということになる。

「この翻訳は印刷に付される8年以上前にはできていて、訳者は印刷の時まで目にしていなかった。ライプツィヒの学生時代に、ゴットシェート教授からこの仕事を依頼された。教授の方は、かつて編集を決意したアリストテレスの詩論を、ドイツ語に訳された最も有名なギリシア悲劇の一つを種々解説するために、添えようとしていた。そのため、教授は、訳者がデンマークへ旅立ってもその手稿を手元に留めていた。」³⁸

『作品集』第5巻（1770年）の冒頭でも、編者のヨハン・ハインリッヒ・シュレーゲルは、兄の人生を振り返った「著者の人生」という文章のなかで、ゴットシェートとのことを改めて想起しているのだが、「1740年にゴットシェート教授とより親しく知り合うようになった」³⁹としているので、「8年以上前」は「5年以上前」の書き誤りかも知れない。あるいは、その文章によれば、その時点でヨハン・エリアス・シュレーゲルは『エレクトラ』をすでに散文で訳していて、そのシュレーゲルに詩行のかたちで『エレクトラ』を訳してもらいたいというのがゴットシェートの依頼内容であったということなので、8年以上前にいったん散文訳ができていて、そのあとゴットシェートの依頼で新たな翻訳原稿をつくったが、それを印刷の時まで目にしていなかった、という事情をやや舌足らずな言い方で書いてしまったのかも知れない。アントニーヴィチはそうに受け取っていた⁴⁰。「著者の人生」では、『ドイツの演劇舞台』に関して次のように記されている。

「シュレーゲルが少し前にもうすでにソフォクレスのエレクトラの散文訳に取り組んでいたと聞いたので、ゴットシェートは、この目的のために、無韻の詩行による翻訳を求めた。しかし、彼が仕上げたのは押韻された詩行による翻訳であった。無韻の詩は、当時、ほとんど愛好されていなかったし、そもそも彼は韻律の優美さにいつも心を奪われていた。この年にゴットシェートに訳稿を委ねたのだが、ゴットシェートは、アリストテレスに関する計画を実行できなかったのもので、その訳稿を手元に持ち続けることとなり、訳者が1747年に返却を求めるまでそれが続いたのであった。返却されると、それはそのままのかたちで、自作の演劇作品とともに出版された。この青年期の訳業に添えられた注解は、ギリシア文学に対する非凡な洞察を証明している。」⁴¹

ゴットシェートから無韻の詩行による翻訳を求められたことは、ヨハン・エリアス・シュレーゲル自身が1740年4月6日の父親に宛てた手紙にも書かれている。そういうふうな求めがなければ、散文体にしたかったと述べられている⁴²。そのような経緯があつて、最終的に1747年の『演劇作品集』に収められたものは、アレクサンダー詩格による翻訳となったのである。

因みに、ゴットシェートの関心事であつたため、詩行の押韻をめぐることは、しばしば『批判的論叢』でも論題となっていた。第5号(1733年)には、ゴットシェートによる「アナクレオンを無韻の詩行で訳す試み」⁴³という文章が掲載されている。第17号(1737年)には、ピューラが匿名で送った『アエネーイス』の無韻による試訳が掲載されたが、同時に、シュヴァルツによる押韻された六脚ヤンブスの訳も紹介され、後者の方が優れているという評価が下されるという出来事があつた⁴⁴。そのように評価したのは、ゴットシェートだと推定される。そして、それに対するピューラの反論の文章がやはり匿名で第18号(1738年)に載ることになった⁴⁵。また、第23号(1740年)にシュトラウベが匿名で書いた「押韻された喜劇はよくないものとなりうることの証明の試み」が載ると⁴⁶、それに対して、ヨハン・エリアス・シュレーゲルが、名前を伏せて、第24号(同年)に「韻文喜劇についてN.N.氏への手紙」を書いている⁴⁷。そのあと、シュトラウベがさらに、第28号(1741年)に匿名で、「悲劇が必然的に韻文で書かれなければならない理由」という文章を寄せている⁴⁸。こうした流れのなかに1740年4月の父親に宛てた手紙を置き入れて考えてみると、『ドイツの演劇舞台』の刊行が始まる前年の1740年というのは、ゴットシェートと親しく知り合い、翻訳を依頼され、押韻についての考えを示した「N.N.氏への手紙」を書くことになる年なのだが、その4月に、父親に対して、ゴットシェート教授が散文体よりも無韻の詩行を望むということがなければ『エレクトラ』は散文体で訳していただろう、と打ち明けていたことになる。

これについては、もう1つ文献資料がある。ヨハン・エリアス・シュレーゲルが弟のヨハン・アドルフ・シュレーゲル(のちにアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルとフリードリッヒ・シュレーゲルの父親となる人物)に宛てた手紙の一部を、ヨハン・ハインリヒ・シュレーゲルが『作品集』第3巻(1764年)に、「古代人と近代人の悲劇に関する批判的論評を含む手紙の抜粋」として収めているのだが⁴⁹、そこに、『エレクトラ』を韻律のない文体で訳しているということが書かれている⁵⁰。この抜粋には日付は入っていない。しかし、先に触れた1740年4月6日の父親宛の手紙に、散文訳の欄外にある鉛筆による書き込みは、大半は、「前年の夏」にこれを読んだ友人たちによるものだと言われているので、1739年の夏には散文訳が存在していたことになる。また、まだ寄宿学校に在籍している時からこの散文訳に取りかかっていたことは、ヨハン・ハインリヒ・シュレーゲルが『作品集』第5巻の「作者の人生」で報告している⁵¹。この寄宿学校を出たのが1739年の3月で⁵²、そのあと、ライプツィヒで学生生活を始めることになる。まだ寄宿学校にいる弟に手紙を書くのはそれ以降のはずなので、ライプツィヒに移ってからでも翻訳を進めて、その年の夏までにはできていたものと推定される。従って、翻訳に取り組んでいることを示す、「手紙の抜粋」の元になった弟宛ての手紙も、ライプツィヒ時代の1739

年に書かれたはずである⁵³。

そうしたライプツィヒでの訳業から 20 年以上の時が経ち、ヨハン・エリアス・シュレーゲルのアレクサンドリア詩格による『エレクトラ』が、弟によって 1761 年の『作品集』に再録される頃には、すでに 1759 年にシュタインブリュッヒェルによる『エレクトラ』のドイツ語訳がチューリッヒで出版されていた。編者のヨハン・ハインリヒ・シュレーゲルは、前置きでその翻訳にも言及している。

「2 年前にチューリッヒで、ゲスナー氏の出版で、氏の前書きを添えて、ソフォクレスのエレクトラの散文訳が公にされた。その訳者は、私の亡くなった兄の仕事を知らなかったようである。この翻訳に対しては、その随所で昨今の詩的な翻訳よりも忠実にギリシア語に従っている、という賞賛を禁じ得ない。」⁵⁴

ハンス・フライは、シュタインブリュッヒェルを、豊富なギリシア語の知識でソフォクレスの作品を次々に訳していく人物として描いているが⁵⁵、そうした翻訳者がチューリッヒに現れたことで、翻訳に見る受容の系譜の物語にも変化が生じることになると思われる。

以上のように 1 つの翻訳が成立した時期を探るなかで、訳者ヨハン・エリアス・シュレーゲルがゴットシェートと交わったライプツィヒ時代 (1739-42) が垣間見え、それを通してライプツィヒを舞台とした詩学史の一コマが、いくつかの物語とともに、仄かに浮かび上がってくる。1742 年秋にシュレーゲルはライプツィヒを離れドレスデンへ、そしてその後間もなく 1743 年にベルリン、ハンブルクを経由してコペンハーゲンへ向かうことになる⁵⁶。その彼がライプツィヒにいた時には、ゴットシェート教授の講義を聴講し、ゴットシェートの弁士会 (Rednergesellschaft) の会員となり、ゴットシェートとシュヴァーベの雑誌を手伝ったのである⁵⁷。それは『ドイツの演劇舞台』の刊行が 1741 年から始まる時期であり、雑誌『批判的論叢』の刊行が 1744 年で終わる前の時期でもある。

『ドイツの演劇舞台』は、第 1 部から第 3 部までの 3 巻と、第 4 部から第 6 部までの 3 巻で傾向が異なり、最初の 3 巻 (1741-42) は翻訳、それもフランス語からの翻訳が多い。あとの 3 巻 (1743-45) は、ヨハン・エリアス・シュレーゲルも含めて、ドイツ語で作られたドイツ人の手になる作品を収めている。まずは、ドイツ語訳を作って採り入れることでドイツの演劇舞台を変えていくプロセスがあり、その後にドイツ語で創作されたよい作品が生まれてくる、という、翻訳を土台として構想された改革の歴史の物語を読み取ることができそうである。そこにあるのは、実作の翻訳を通じての作劇規範の内面化である。採り入れるものが古代の劇か近代の劇かというところには新旧論争的な物語の襞があるわけだが、その点で言えば、「改革の歴史」の出発点であったはずの第 1 部の内容を大きく変更して、アリストテレスやソフォクレスがそこから消えてしまった『ドイツの演劇舞台』は、古代ギリシアに直接学ぶという性格を失ったと見ることもできそうである。もう少し俯瞰的に捉えれば、ソフォクレスのラテン語訳やフランス語訳があれば事足りた時代が過ぎて、『ドイツの演劇舞台』においてドイツ語訳に新たに付

与されるはずであった役割は思い描いた通りには実現しなかった、とも言えそうである。

また、古典を翻訳するなかで押韻に縛られること、押韻に縛られない無韻の方が好ましいといった意識に縛られることなどが前景化していた時代でもあり、そのことが『批判的論叢』でしばしば論題となり、ヨハン・エリアス・シュレーゲルの『エレクトラ』の翻訳にもその問題が付いて回っていた。

我々が、『エレクトラ』の翻訳という一つの事柄をめぐって、事情を把握しながらそこにある物語の筋を読み、詩学史の記述を与えようとするときには、いま述べたようないくつかの物語が仮構的に徐々に形作られ、組み合わされて、ライブツィヒのヨハン・エリアス・シュレーゲルがゴットシェートとともに存在した詩学史上の位置を表すことを試みるようになる、と言えるのではないだろうか。それらは、その時代にとって翻訳はどのような意味をもつのかということが隠れたパラダイムとしてありそれを分節化していく物語群として捉えられるようにも思われる。

3. ゴットシェートの『オイディプス王』解釈をめぐって

ー主人公と受容者を重ね合わせる道徳的解釈

次に、作品の翻訳ではなく、さらに一步踏み込んだ作品の解釈という点から、ソフォクレス受容の一局面を見てみることにしたい。素材として取り上げるのはゴットシェートが『オイディプス王』の解釈に触れた一節だが、ゴットシェートの場合、ソフォクレスの悲劇作品を解釈するということは、アリストテレス詩学の受容であるとも言える。『ドイツの演劇舞台』第1部において、アリストテレス詩学を翻訳し、それを注解するという予告は幻に終わったが、『批判的詩論』という詩学書を見ることでアリストテレス詩学の受け止め方を別のかたちで理解することができる。

ゴットシェートの『批判的詩論』第2部は文学のジャンル論となっていて、その第10章が悲劇論に、続く第11章が喜劇論に当てられている⁵⁸。ゴットシェートは、その起源においてはまだ趣味のよくないものであった悲劇がその後にギリシア人のもとで完全なものとなったと捉えていて、第10章の第5節以降で、その完成段階の例として、ソフォクレスの『オイディプス王』を取り上げている。

ゴットシェートによれば、ギリシアにおいて完成した悲劇は、「偉大な人物の不幸な事例を通じて、悲しみ、驚愕、同情、賛嘆を観客に喚起すること」を意図している⁵⁹。その言葉に続けるかたちで、ゴットシェートは次のように書いている。

「それ故、アリストテレスは悲劇を、高貴な人物が、過酷で予期しない不幸な事例をそれによって招いてしまう行為の模倣だと説明した。つまり、詩人は、ファーベル（話の筋）を通じて真理を教えようとし、観客は、この世界の偉大な人物のそのような深刻な事態を

目の当たりにすることで、自分自身の苦難に対して心構えをしておこうとするのである。たとえば、ソフォクレスの最も有名な悲劇の一つである『オイディプス』は、このテーバイの王が、自らの忌まわしい行動のために迎えることとなった哀れな結末を提示している。もっとも、彼がそこに陥ったのは、ほとんど彼の責任ではなかったのだが。それはまさに、悲劇の主人公はきわめて悪いわけでもきわめて善いわけでもないと述べる際に、アリストテレスが捉えようとしていたことである。きわめて悪いわけではないというのは、そうでなければ、誰も彼の不幸に同情せず、むしろそれを喜ぶからである。しかしまた、きわめて善いわけでもないというのは、そうでなければ、罪のない人々をこれほど厳しく罰したとなると、神意は容易にその不公正さを責められることになるからである。そして、オイディプスというのは、そういう人なのである。」⁶⁰

ゴットシェートのこの議論は、明示されているように、アリストテレス『詩学』を踏まえている。「悲劇の主人公はきわめて悪いわけでもきわめて善いわけでもない」というのは、念頭にあるのは、『詩学』の第13章の議論であろう。そこでは、悲劇の組み立ては、「おそれとあわれみを引き起こす出来事の再現でなければならない」とされ、善い人が不幸になるとか、悪い人が幸福になるといった筋では、おそれもあわれみも喚起しないので好ましくないし、まったくの悪人が不幸に転じるというのも、おそれもあわれみも喚起しないと説明されている⁶¹。

「なぜなら、あわれみは、不幸に値しないにもかかわらず不幸におちいる人に対して起こるのであり、おそれは、わたしたちに似た人が不幸になるときに生じるからである。」⁶²

その論を進めて、アリストテレスは、次のように結論付けている。

「こうしてあとに残るのは、これらの場合の中間にある人である。このような人は、徳と正義においてすぐれているわけではないが、卑劣さや邪悪さのゆえに不幸になるのではなく、なんらかのあやまちのゆえに不幸になる者であり、しかも大きな名声と幸福を享受している者の一人である。たとえば、オイディプス、テュエステス、そのほか似たような家柄の、名の知られた人物がそうである。」⁶³

アリストテレスは、「いまでは、もっともすぐれた悲劇は少数の名家をめぐる話にもとづいて組み立てられる」⁶⁴という事実がそれを証明しているとも述べている。

オイディプスについてゴットシェートは、アリストテレスの「中間にある人」という説明に呼応するように、第10章第6節で、オイディプスは「総じて人間がよくそうであるように、中間的な種類」の人だと明言している。父親殺しはむしろそれを避けようとしてコリントスを離れたのであり、イオカステのことも母親とは知らなかったわけだが、かっとなって暴力をふるうところには罪がある。まったく罪がないとも言えないし、完全に罪があるとも言えない⁶⁵、と

ゴットシェートは結論付ける。

「彼はある種の徳も、ある種の悪徳も、兼ね備えているのだが、後者がただ彼を不幸に突き落とすだけなのである。というのも、何者も殺さないようにさえしていれば、他のことはすべて起こらなかったからである。神託によってあれほど明確な予言が与えられたあとは、それにふさわしくあらゆる殺人に用心すべきだったのである。」⁶⁶

ゴットシェートによれば、オイディプスがこのような性質だからこそ、悲劇は大部分の観客にとって教化的（*erbaulich*）なものとなる。観客も大抵はまた、きわめて善でもきわめて悪でもないからである。一方では同情し、もう一方では、悪徳は必ず罰する神の報復に賛嘆する⁶⁷。

ゴットシェートは、悲劇を、「偉大な人物の不幸な事例を通じて、悲しみ、驚愕、同情、賛嘆を観客に喚起する」ものだとしていたわけだが、ここでは、「同情」は悲劇の主人公オイディプスに対して喚起されるのに対し、「賛嘆」は「神の報復」に対して喚起される点が興味深い。「観客は、この世界の偉大な人物のそのような深刻な事態を目の当たりにすることで、自分自身の苦難に対して心構えをしておこうとする」と説明されていたが、主人公への「同情」は、感情移入という心理的同化作用によって、「自分自身」の問題として感じられるために必要なのだと推察される。しかし、自分自身の問題として感じられた上で重要になってくるのは、よく知らない間に犯した罪によって罰せられるオイディプスの側から見た不条理ではなく、悪徳は必ず罰するという神の側の意志なのである。それによって、観客は道徳を意識するようになり、悲劇は「教化的」なものとなると考えられる。

こうしたゴットシェートの見方を、本稿では、神による懲罰、神の側の意志を不幸の要因として前景化する解釈として捉えておきたい。しかしながら、そうした解釈は、必ずしも一般的ではないと思われる。このような解釈と対比されるものとして、神による懲罰という神意ではなく、人間の内面に不幸に陥ることの原因を見る解釈があるだろう。ここでは、考察のための一つの補助線として、そうした見方の一例と言えそうな當津武彦の『アリストテレス『詩学』の研究』⁶⁸を参照してみたい。アリストテレス『詩学』の悲劇論に関して、當津は、そこに「ヒュブリス」や「ネメシス」や「運命」といった鍵となる語が一切出てこないことから、そこに書かれているのは悲劇を「運命」の悲劇ではなく人間の「過誤」の悲劇として捉える悲劇論である、という主張を展開していた。

「神々と人間とのかかわりをぬきにしては成り立ちえないギリシアの叙事詩や悲劇について、これを全く不問に付し、これを示唆する語をすら用いようとしない『詩学』の意図は何なのか。アリストテレスは同時代の悲劇のみならず、古典期の悲劇についても、そこで主題にされている神観や人間観について独自の意見を持ち、これに基づいて『詩学』を構成しようとしたのではないか。神の人間に対する支配が、叙事詩や悲劇のいうごとく絶対的だとすれば、人間の不幸、破局、病苦、死はもとより、悪事、非行までもそこに神の宰

配をみなければならないはずであろう。神々へのたまさかなる暴慢不敬も許さず懲罰し、所詮はつかの間のものでしかありえない人間の幸福を、分限を超えるとみるかぎり嫉視して許そうとしない神々の酷薄非情。アリストテレスは詩の描くこのような人間像に、それなりの見識をもって臨んだゆえにこそ、かの常套的な悲劇用語をあえて採摘しようとはしなかったのではあるまいか。そこにはまたあまりにも弱い人間の肩の上に、あまりにも重くのしかかる運命論や、神々の「絶対的決定論」へのひそかな反論をよみとることができるように思われる。」⁶⁹

オイディプスの激昂しやすい性格や、国王であり知恵者として知られた存在として国の災いを自らの手で解決してみせるという奢りなどは、オイディプスという人間の不遜な側面を描いているようにも思われるが、當津は、オイディプスに「ヒュブリス」に当たる言動はないと見る。ライオスを殺した場面も、挑発を受けての自衛であり、相手が父親だとは知らないし、イオカステとの結婚も、テーバイを救って人々から請われた結果に過ぎないし、ライオス殺しの犯人を突き止めようとする強い意志は、国王として当然だと言う⁷⁰。むしろ、神託について懐疑的な言葉を弄するイオカステの方が不遜で「ヒュブリス」と評されるのではないか、とも述べている⁷¹。當津の論は、アリストテレス詩学の考え方では、不幸の原因は神にあるのではなく、人間の「過誤」、とくに「無知」にある、とする。

「悲劇の人物の不幸や没落の原因は、神々にあるのではなく、その人物自身の行為にあることをこそ詩人は描かねばならない。我々はまた『詩学』の悲劇構成論の基幹をなす第十三章において悲劇の主人物の人物設定を行ったのち、この主人物が自らの「過誤」とくに「大いなる過誤」によって、幸から不幸へと転落していく筋構成をこそ至上とする立場をとっているのをみる。この「過誤」とは、第十四章の「苦難、惨行」の描写に徴して、惨行の行われんとする相手の素性の、近親者たることの「無知」を重要な条件にしている。ここでもまた悲劇の生ずる要因は、その人の外にはなく、その人の内なる無知にあるとされている。」⁷²

この「無知」というのは、誰にでもある人間としての知の限界なので、人間は不幸になることを避けることができない。神による懲罰という神意ではなく、人間の内面に不幸に陥ることの原因を見ろというのが、當津の『詩学』解釈である。この見方は、神による懲罰を前景化するゴットシェートの見方とは相容れないように思われる。

本稿の目的は、悲劇の解釈の妥当性を吟味することではなく、ゴットシェートの解釈の特徴を浮かび上がらせることなので、ここでまた別の補助線を引く意味で、ヴォルフガング・ベルナルトによる研究書『ソフォクレスにおけるオイディプスの最期』（2001年）⁷³にも目を向けてみたい。ベルナルトは、ソフォクレスの悲劇では、性格と行動と運命の間の連関が複雑につくられていて、単に道徳的な命題を象徴するものとして主人公オイディプスが存在しているわけ

ではない、と言う。そして、オイディプスを道徳的に過ちを犯した者の例示として見る見方をストア的だと捉えている⁷⁴。

ベルナルトの論には、議論の前提として、ストア派による思想の転換という枠組みがある。ストア派は、人間の運命の一貫した決定性を信じていて、意志の自由というのは、車に繋がれている犬が自発的に一緒に付き従うかさもなければ一緒に引きずられるかというほどの意味の、自由とは言えないような「自由」しかない、と考える。ここに「運命の皮肉（イロニー）」がある。オイディプスの素材をそうした決定論的な意味で解釈できることを示したのが、セネカの悲劇である。そして、ベルナルトの見立てでは、ソフォクレスの場合はそうではなかった。ソフォクレスの場合、オイディプスは自分の素性を分かっておらず、神託の実現を避けるためには、自分が出会う父親ほどの年齢の男性は父親の可能性があり、母親ほどの年齢の女性も母親の可能性があるとすることははっきり理解しなければならなかったのに、それをせずに神託を成就させてしまった。神託から導き出した結論が間違っていて、それは避けることのできる結論であった、というのである⁷⁵。

神の智慧と人間の自由はストア派以前の古代ギリシアの考え方では両立可能であった、とベルナルトは言う⁷⁶。性格的な弱さに基づいているが、人間的に許されることが可能な過ちという意味で、つまり、アリストテレスが言うハマルティアの意味で、より多様に考えられたはずの「罪」は、しかしながら、ストア派以降、人間は変えることのできない運命と向き合っているという決定論的な考え方が出てきてその前提に立つと、その可能性が限定されてくる⁷⁷。ベルナルトに言わせると、神託が変えることのできないものという考え方は、その端緒はストア派にあるのだが、むしろ近代的なものである⁷⁸。ルネサンスのストア派受容の影響を受けた近代の倫理学や、そこから生じた近代の詩学は、「過ち」を、道徳的にまったく許されない罪という意味でのみ理解する。その結果、過ちを犯して転落することになったオイディプスは否定的に捉えられるべき人物となり、悲劇はその例示と解釈されることになる⁷⁹。

ベルナルトはそうした近代的なオイディプス解釈の代表例として、ゴットシェートの『批判的詩論』を挙げている。

「ゴットシェートの悲劇解釈に特徴的なのは、悲劇というのは抽象的な道徳命題を象徴的に表現しようとする、という考え方である。ゴットシェートによれば、根本において、『オイディプス王』で重要なのは、主たる教え、「神の全知が欠けることはありえない」という「道徳的命題」だけである。これは私には、ソフォクレスの描き方に合っているとは思われないし、アリストテレスの悲劇理論の意図に適合しているとも思われない。」⁸⁰

ベルナルトは、アリストテレス詩学の第13章で求められている「中間的な性格」というのは、模範的な事例という意味でも、警告的な事例という意味でも、道徳的な見本例ということではないし、むしろ重要なのは真に個人的な性格で類型ではない、とも述べている⁸¹。

神の側の意志を不幸の要因として前景化するゴットシェートの見方、『オイディプス王』を神

が運命を定める運命悲劇と見る見方をベルナルトは否定しているように映る。運命を定める物語を執筆できるのは神だけではなく、それはストア派の受容が前面に出てきている近代的な詩学の捉え方で、オイディプスにも自分自身の運命の物語を変容させるということに関わるチャンスがあった、という点にベルナルトの議論の力点がある。悪徳は必ず罰せられるという抽象的な道德論の見本として主人公がいるということではない、とベルナルトの論はひとまず括れそうである。

もっとも、先に見たように、ゴットシェート自身、「何者も殺さないようにさえしていれば、他のことはすべて起こらなかった」、「神託によってあれほど明確な予言が与えられたあとは、それにふさわしくあらゆる殺人に用心すべきだった」と述べていたので、ベルナルトがオイディプスにもチャンスはあったとするのと同じ見方はゴットシェートにも見られるわけである。ただし、悪徳は必ず罰せられるという神による懲罰への賛嘆という契機に重きがあるということになると、総論としては神の全知が前景化する形になっていると思われる。

暫定的に整理するなら、ゴットシェートの議論は神の全知を前景化していて、そういう意味で絶対的決定論の性格が強いと言えそうだが、當津の捉えたアリストテレスやソフォクレスは絶対的決定論を乗り越えた「無知の過誤」をもたらす悲劇を考えているのであり、その点に関して、ベルナルトの目には、ゴットシェートが悲劇の物語を絶対的な決定論に縮減してしまっているのはストア派による転換を受容した流れのなかにいるため、と映っている、ということになるだろうか。

ここで、ゴットシェートの悲劇論を検討する最後の、3番目の補助線として、ドイツにおけるソフォクレス翻訳の歴史に名前を残しているオーピッツにもう一度立ち返っておきたい。

オーピッツが『アンティゴネー』を翻訳してから約百年後に書かれた『批判的論叢』第3巻第10号（1734年）の解説文は、オーピッツによるこの翻訳の動機と文体について次のように記していた。

「彼がこの悲劇を翻訳した主な理由は、プロイセンの読者が、支配者の賢明な統制があれば与えられるはずであった至福というものを、市民戦争や、この悲劇のなかで描かれた他の不都合な状況に接するなかで、認識し、高く評価することを学んでももらいたいからである。というのも、こうした劇が単に娯楽のため、華やかさのために配列され、収められているとするなら、それは、愚かで悪趣味な想像とされなければならないからであり、むしろ真の意図は、他の者に起こった幸福や不幸をよく見て、我々がどのようにして我々のよき幸福を維持し、また、どのようにして不幸に耐えるのがよいか、学ぶべきだ、ということにあるからである。翻訳そのものは、たしかに、ギリシア語のテキストにかなり従っているが、偉大な作者が自身の思想を表現し慣れている優美で魅力的な文体ではない。」⁸²

幸福を維持し不幸に耐えるそのやり方を学ぶという、主人公に重ね合わせた受容の姿勢が目く引く。オーピッツ自身、冒頭の献辞のなかで、「我々は、我々の運命が好ましいもの場合は、

道徳的に見てよいとされる行動を保持することを学びたいと考え、それが不幸で沈滞している場合は、できるだけ節度を保ち正直な心根で耐えることを学びたいと考える」、と書いていた⁸³。これについて、ミヒャエル・フォン・アルブレヒトは、「三十年戦争の困難な時代にドイツの読者が悲劇のなかに道徳的な教えを探し求めたとしても、驚くことではない」と評している⁸⁴。

オーピッツは、1624年に『ドイツ詩学の書』を公刊したすぐ後の1625年には、ストア派のセネカの悲劇『トロイアの女たち』をドイツ語に訳して印刷している⁸⁵。オーピッツの1646年の詩的作品集では、それが『アンティゴネー』のドイツ語訳の直後に収められている⁸⁶。確認されている限り、セネカの『トロイアの女たち』の劇のドイツ語訳としては、最も古いもののようである⁸⁷。『批判的論叢』の第1号(1732)の第一番目の記事は、「おおよその古代ローマ作家のドイツ語訳について」⁸⁸というもので、作家別にドイツ語訳のリストが示されていたのだが、セネカのところには、このオーピッツの翻訳が1つ挙げられているだけである⁸⁹。因みに、オーピッツは、「読者の方々へ」という前書きのなかで、ラテン語の意味するものには可能な限り従ったが、逐語的に訳すこと、行の数に縛られることはことはできなかったと述べている。悲劇の翻訳のあとには、オーピッツが清書中に思いついたという注釈が付されている⁹⁰。

悲劇に関するオーピッツの詩学上の考え方が、『トロイアの女たち』の翻訳に付されたこの「読者の方々へ」という前書きから窺える。

「悲劇は、エピクテトスが語ったと言われるように、すべての行状をただ単に運任せに行っている人々を映す鏡に他ならない。我々人間は、概して、その鏡を利用している。あれこれの予期せぬ偶然を予見し、それに対して身を守って、そうして、偶然というものが、表面的なものや、人間に本来関わらないようなもの以上に自分に害を与えないようにしている僅かな人を除いては。そのような動揺しない心は、しかしながら、悲劇のなかで人間の生の困難さを目にすることによって、我々に、まず最初に、植え付けられる。それから、都市や国全体の偉大な人々が極度に没落するのをしばしば目にして観察することで、たしかに我々は、我々なりに然るべきかたちで耐え、彼らを哀れみ、悲しさからもう一度涙を流すことを抑えられないわけだが、それに加えて、他の者にふりかかった多くの苦難や災いを常に見ることで、我々にふりかかるかも知れない我々自身の苦難や災いをそれほど恐れなくなり、よりよく耐えられるようになるのである。神々自身が作ったというように考えられていた強大なトロイアの都市が炎に包まれ、埃や灰になるのを見た上でなら、防ぐことができないかも知れない祖国の破滅や被害を、いったい誰が以前よりも大きな心で耐えられないというのだろうか。」⁹¹

悲劇のなかの偉大な人物の境遇が一種の範例となり、心に抵抗力をつけ、混乱しない心をもてようになるという考え方である。偉大な人物の不幸が自分たち自身の不幸に対する心の苦痛を緩和し、心を安定させる。物語論として考えるなら、これは、運命の到来を物語論的に捉えるために、悲劇のなかで不幸を生み出すことになっている物語と物語のせめぎ合いを第一に捉

えようとしているわけではなく、偶然が運命をもたらすなどしたあとに、主人公の物語と受容者自身の物語を比較して後者の情動の制御を説明しようとするかたちになっている。ギリシア神話のトロイア戦争後を素材としたセネカの悲劇の舞台と、三十年戦争の時代を生きている悲劇の受容者の生の舞台とが重ね合わせられている⁹²。この悲劇を翻訳した理由として、オーピッツは、今日まで残っているなかで最も美しいローマ悲劇というだけでなく、心をしっかりとした範例によって保つことが必要な今の時代に最もよく合うと思われる点を挙げている⁹³。

オーピッツの場合と比較すると理由は異なるが、ゴットシェートの悲劇論で、主人公に同情しつつ、その主人公に下される運命を道德命題の象徴として受容者が受け取るという構図もまた、物語の関係論として考えた時に、主人公の物語と受容者の物語の重ね合わせが議論の中心にあると思われる。悲劇の主人公オイディプスに対して喚起される同情は、主人公の位置に受容者自身を置くように促して、感情移入から両者の物語の重ね合わせを促す同化的な効果をもたらすが、そこに、「偉大な人物のそのような深刻な事態を目の当たりにすることで、自分自身の苦難に対して心構えをしておこうとする」心理が続いて、道德性をめぐる受容者の物語が揺さぶられる異化的な効果が生まれる。

オイディプスの悲劇的運命の生成を物語論的に捉えれば、智慧の神アポロンが作者として、オイディプスのライフストーリー、その運命の物語というテキストを制御していて、知恵者オイディプスにはテキストを制御する能力はない、と見るのが絶対的決定論の捉え方で、『オイディプス王』はその作者性をめぐる問題そのものを物語として見せる物語ということになると思われる。この悲劇の解釈の歴史は、その点をめぐって、オイディプスに作者性への関与は可能であったかどうか、己自身の物語の作者性を知るということはどういうことなのか、限定的な作者性しかないと分かったらどのような物語を描くべきなのか、ということ問い続けているようにも見える。しかし、ゴットシェートの場合、悲劇論の論理構成で主眼となるのは、悲劇的な運命を生成させる物語の関係論、すなわち、アポロンの描く物語がオイディプスが描いていた物語を凌駕するという関係論よりも、主人公の物語と受容者の物語を重ね合わせるという関係論のように見受けられる。それは、運命の生成を物語のせめぎ合いというかたちで描くことにフォーカスするよりも、作品の主人公と受容者の間に物語の相関を見る思考と捉えられる。そうだとすれば、悲劇の作者は、教化的に振る舞い、演劇舞台を通じて、受容者が書く受容者自身の物語の作者性に影響を与えようすることになる。つまり、主人公と受容者の物語の相関するところを詩人が制御することになる。これがゴットシェートの考えていた啓蒙主義詩学の物語論的構造と見てよいのだろうか。これを作業仮説として、今後、文献の検証を続けていきたい。

結びに代えて

詩学史記述が物語論を反省的に組み入れた時の転回はどうな形になっていくのだろうか。

本稿の2つの素材をめぐる考察から、最後に暫定的な見通しを引き出しておきたい。

物語論を反省的に組み入れた時の転回の第一は、詩学史記述自体が様々な物語の複合体であるということに自覚するようになることだろうか。詩学史を記述するのに、1つの正しい歴史を追い求めることは難しい。同じ時代に生きた人々の意識のなかにすでに複数の物語が見方としてあり、その再構成に努める他ない。また、後の時代に生きる者が詩学史を記述しようとする際に、事実を語るために設定する物語もそこに関わってくる。ドイツ演劇の改革、ライプツィヒとチューリッヒの論争、美学の自律といった水準への還元が従来目立ったように思われる。しかし、資料の発掘が進むと、当時の関連文献から窺われる意識のなかには、もちろんそこに繋がるのだが、新旧論争上の立場を滲ませる物語、虚飾を批判する物語、悟性の能力と結びつけて語る物語、ジャンルを特徴付けようとする物語など、もう少しサイズの小さな物語が目につくように思われる⁹⁴。

ヨハン・エリアス・シュレーゲルが『エレクトラ』を訳した時期をめぐる問題からは、シュレーゲルやゴットシェートの意識のなかで交錯する、ギリシアやフランスの演劇を実例としてドイツの演劇舞台に異化的効果を与えようとする当時の翻訳観や、翻訳において詩行の形式や押韻に縛られることへの立場選択といったことが窺われたように思われる。翻訳原稿が完成してから印刷されるまでの間には時間があり、翻訳時期はシュレーゲルがライプツィヒで過ごした学生時代にまで遡った。それは、ゴットシェートの『ドイツの演劇舞台』のための構想と関係していた。ゴットシェートが理想としたその刊行内容は、アリストテレス詩学があり、ソフォクレスの翻訳があり、それから主にフランスの戯曲の翻訳があって、ドイツの演劇作品が続くというものであった。18世紀半ばになると、ソフォクレスの翻訳はラテン語とフランス語があれば事足りた時代は過ぎ、ゴットシェートの目論見では、ドイツの演劇舞台が、発展の起源としてアリストテレスやソフォクレスを意識した詩学の歴史のなかに位置づけられるはずであった。しかし、予告された『ドイツの演劇舞台』第1部の内容は幻に終わり、『ドイツの演劇舞台』は主としてフランス語からの翻訳とドイツ語で創作されたものから成る戯曲集となって、アリストテレスやソフォクレスはそこからは消えてしまった。予告通りにならなかったところに、ラテン語とフランス語の翻訳があれば事足りてギリシア語の世界とドイツ語の世界を直接結びつける力が弱かった時代の名残を見ればよいのだろうか。アントニー・ヴィチは、ゴットシェートのアリストテレス『詩学』の翻訳について、その存在さえも疑っていた⁹⁵。ダンツェルは、寄宿学校時代から『エレクトラ』の翻訳に取り組んでいたヨハン・エリアス・シュレーゲルこそ、ゴットシェート以上にオーピッツの後継者だと見ていた⁹⁶。あるいは、『エレクトラ』を無韻で訳してもらうこともゴットシェートの念頭にはあったという点に、翻訳時のハードルを下げてでもドイツ語の世界に結びつけていきたいという意欲を読み取ればよいのだろうか⁹⁷。我々はこうした出来事から、当時の詩学の意識を支えた物語や、我々が当時の詩学について語る物語を仮構的に紡ぎ出し、暗黙のパラダイムの推定も含めて、様々に探っていくことが可能であるように思われる。

物語論を反省的に組み入れた時の転回の第二は、当時の詩学の観念を現代の物語論の発想で

捉え返すことである。ゴットシェートが『批判的詩論』で示している『オイディプス王』の解釈の問題からは、主人公をある種の範例として受容者の心理に情動的な異化的効果を与えようとする演劇の役割が窺えた。詩人の創作について、模倣説を基盤として、悟性の能力論と関連づけて論じていた『批判的詩論』の第1部の議論に比べると、第2部の悲劇論で示された『オイディプス王』の解釈は、作品の受容面に傾倒した議論のように映る。当時の作用詩学は、受容者に対する同化と異化の作用を考えるのが基本姿勢だと思われる。ここでは、主人公への同情は、感情移入という心理的同化作用をもたらし、悲劇の出来事を自身の問題として感じさせるが、そこでさらに、悪徳は必ず罰するという神の側の意志に賛嘆することによって、観客は道徳を意識するようになり、悲劇は「教化的」なものとなる。悲劇『オイディプス王』では、国王であるオイディプスが犯人を捜し出すはずが、自らが犯人であったという運命の皮肉が徐々に明らかになり、知恵者オイディプスが事態を解決する物語は実現せず、神託によって暗示されていた智慧の神アポロンの物語が顕在化して実現する。それは、物語の作者性は人間ではなく神の手にあることが改めて示される物語とも言える。しかし、ゴットシェートの解釈の最大の力点は、物語の関係論として見た場合でも、人間の側から見た物語と神の側から見た物語の力関係というところではなく、悲劇の主人公の物語と悲劇の受容者の物語の間の関係にあって、その構図のなかで、両者が接近する同化や、受容者の物語の変容を促す異化という作用が説明されるようなかたちになっている。そうすると、悲劇の作者は、主人公の物語を描くだけでなく、それによってその物語が受容者の物語と相関する部分に介在することになる。悲劇の訳者もそうした相関を意識する。理論装置として当時の同化と異化の作用詩学を生み出しているのが、主人公の物語と受容者の物語を関係づけるこうした思考であるように見受けられる。

上述の第二の点に関して、論の最後に今後の見通しを付言しておく、本稿筆者の以前からの見立てでは、創作者や受容者が物語の筋をどのように付けていくかという観点からの、「物語論的再解釈」とでも言うべきこうした捉え直しは、悲劇の喚起する情念についての議論にとどまらず、この時代の詩学の基本的な発想である自然模倣説に関しても有用である。この時代の自然模倣説は、自然を模倣するという古めかしい構えの下で、実質的には、創作者や受容者がどのように物語の筋を付けていくべきかという性質の議論をしていると考えている。

本稿が行き着いて垣間見たのは、突き詰めて言えば、ギリシア、フランスの演劇の翻訳がドイツの演劇舞台に異化効果を与えるという発想であり、演劇のなかの主人公の物語が受容者の道徳観に異化効果を与えるという発想であったように思われる。ただし、これらは、詩学史記述の物語論的転回という本稿の方法論の設定から見てきた暫定的な風景に過ぎない。取り上げたのもソフォクレス受容の断片的な2つの局面に過ぎないので、「18世紀詩学の物語論的再解釈」という課題について、稿を改めて更なる検討を続けたい。

本論文は、平成26年度－平成29年度日本学術振興会科学研究費助成事業、基盤研究(C)「十八世紀ドイツ詩学の物語論的再解釈—模倣説の「情動」を物語の変容から捉える試み」(課題番号 JP26370384)による研究成果の一部である。

¹ Beyträge zur critischen Historie der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit, herausgegeben von Einigen Mitgliedern der Deutschen Gesellschaft in Leipzig. Bd.3. 1734, S.195-245 この雑誌（『ドイツの言語、詩作、雄弁の批判的叙述のための論叢』）は、ライプツィヒで1732年から1744年まで刊行された。本稿では『批判的論叢』と略記する。

² ibid.

³ ibid. S.195

⁴ ibid. S.239-242

⁵ S. F. W. Hoffmann's bibliographisches Lexicon der gesammten Litteratur der Griechen. 2., umgearb., durchaus verm., verb. und fortges. Ausg. Bd.3(O-Z) 1845, S.425-428 ; 翻訳ではないが、オイディプスの神話素材を劇にしたものとしては、1550年のハンス・ザックスの作品がある。Hans Sachs: Die unglückhafftig königin Jocasta. In: Hans Sachs, hrsg. von Adelbert von Keller. Bd.8 1964, S.29-53

⁶ Ajax Lorarius: Ein Heydnische Tragoedia von dem griechischen Poeten Sophocle erstlich erdichtet vnd nachmals durch Josephum Scaliger in Lateinische Sprach vertieret ; auch anno 1587 im Monat Julio mit etlichen artigen zusätzen zu Straßburg agieret / Jetzt aber widerumb von Newen vbersehen exorniret vnd gemehret, und diß 1608 Jahr, gemeltea Monats, in Theatro Academico öffentlich daselbsten gehalten: verteutschet durch M. W. S. M. 1608

⁷ M.W.S.M.は、Mag. Wolfhart Spangenberg Mansfeldiensを表すとベルリン国立図書館のカタログに記載がある。

⁸ a.a.O. S.239f.

⁹ Mart. Opii Opera Poetica. Das ist Geistliche vnd Weltliche Poemata 1646, S.164-209

¹⁰ ibid. S.167

¹¹ Des griechischen Tragoedienschreibers Sophoclis Antigone. Deutsch gegeben durch Martinum Opium. 1636

¹² Vgl. Josefine Kitzbichler: Die Brüder Stolberg als Übersetzer griechischer Tragödien. In: Andreas F. Kelletat, Aleksey Tashinskiy (Hg.): Übersetzer als Entdecker. Ihr Leben und Werk als Gegenstand translationswissenschaftlicher und literaturgeschichtlicher Forschung. 2014, S.209-228

¹³ Le Theatre Des Grecs, par le R. P. Brumoy, de la Compagnie de Jesus. 1730

¹⁴ Hans Frey: Deutsche Sophoklesübersetzungen. Grenzen und Möglichkeiten des Übersetzens am Beispiel der Tragödie König Oedipus von Sophokles. 1964, S.198

¹⁵ Theatralische Werke durch Johann Elias Schlegel. 1747, S.255-366

¹⁶ Der Ausgang des Aeas, ein Trauerspiel aus dem Griechischen des Sophocles. [Übers.: Christian Tobias Damm] 1757

¹⁷ Vgl. S. F. W. Hoffmann's bibliographisches Lexicon der gesammten Litteratur der Griechen. Bd.3(O-Z) 1845, S.426; Oedipus, König von Thebe, ein Trauerspiel des Sophokles, nebst Pindars zweiter Ode. Aus dem Griechischen, vom Uebersetzer der Electra [=Johann Jakob Steinbrüchel] 1759

¹⁸ Vgl. ibid. S.426-428; Electra. Ein Trauerspiel des Sophokles, nebst Pindars erster Ode. Aus dem Griechischen [von J.J. Steinbrüchel]. 1759; Antigone. Ein Trauerspiel des Sophokles, nebst Pindars vierter und fünfter Ode. Aus dem Griechischen, von dem Uebersetzer des Oedipus [J.J. Steinbrüchel]. 1760; Philoctetes. Ein Trauerspiel des Sophokles, nebst Pindars dritter Ode. Aus dem Griechischen, von dem Uebersetzer der Electra [J.J. Steinbrüchel]. 1760

¹⁹ Vgl. ibid. S.425 『全ギリシア文学書誌事典』はこのように書いているが、BSB（バイエルン州立図書館）のカタログでは、1760年の版について記載がある。Elektra, Antigone, Ödipus König von Thebe, Philoctetes nebst Pindars 1.-5. Ode. Wien und Leipzig. 1760

²⁰ Vgl. a.a.O. S.149

²¹ Vgl. ibid. S.427-428 『全ギリシア文学書誌事典』はこのように書いているが、『コロヌスのオイディプス』の1769年の版については所蔵が確認できていない。1771年に雑誌に掲載されたものは現物が確認できた。Des Sophocles Oedipus in Kolonus, übersetzt vom Hrn. Pastor Goldhagen. In: Deutsche Bibliothek der schönen Wissenschaften, herausgegeben von Herm Klotz. Drey und zwanzigstes Stück. 1771, S.494-524; 『トラキニアイ』については、『全ギリシア文学書誌事典』記載の文献が確認できている。Des Sophocles Trauerspiele. Aus dem Griechischen übersetzt von E. M. Goldhagen. Bd.1 (Antigone, Philoctet, der wüthende Ajax, Trachinierinnen) 1777

²² Einleitung in die Schönen Wissenschaften. Nach dem Französischen des Herrn Batteux, mit Zusätzen vermehret von C. W. Ramler. Zweyter Band. 1756, S.291-312 ハンス・フライはこの点にも触れているが、1758年と書いているのは、1756年の誤りではないかと推測される。Vgl. a.a.O. S.150

²³ Theatralische Werke durch Johann Elias Schlegel. 1747, S.36

²⁴ ibid. S.35 『エレクトラ』は3篇の劇が収められているなかの3番目の作品だが、それが「4番目の作品」と言われているのは、先に出版された『カヌート』を、切り離して出版されているものとして数え入れているためだと思われる。「前書き」の2ページ目に、「悲劇『カヌート』は数ヶ月前に単独で出版された」という一文がある。ibid. S.4; vgl. Johann Elias Schlegel: Canut. Ein Trauerspiel. 1746; ADBにも「(すでに1746年に切り離されて出版された)『カヌート』という表現が見られる。vgl. Johann von Antoniewicz: "Schlegel, Elias", Allgemeine Deutsche Biographie (ADB), Bd.31. 1890, S. 378f. ; 因みに、本文で引用したこの部分の文章は、1764年の『作品集』では省かれている。vgl. Johann Elias Schlegel: Werke. Dritter Theil, hrsg. v. Johann Heinrich Schlegel. 1764, S.240 これより後の文章が編集者の手によって省かれている。

- ²⁵ この表題は、従来、内容を汲んで『ドイツ戯曲集』と訳されてきた。
- ²⁶ *Beyträge zur critischen Historie der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*, hrsg. von einigen Liebhabern der deutschen Litteratur. Bd.6. 1740, S.524f.
- ²⁷ *ibid.* S.525
- ²⁸ *ibid.* S.525f.
- ²⁹ Die Deutsche Schaubühne nach den Regeln der alten Griechen und Römer eingerichtet, und mit einer Vorrede herausgegeben von J. C. Gottscheden. Zweyter Theil. 1741
- ³⁰ Die Deutsche Schaubühne nach den Regeln der alten Griechen und Römer eingerichtet, und mit einer Vorrede herausgegeben von J. C. Gottscheden. Dritter Theil. 1741; Die Deutsche Schaubühne nach den Regeln und Mustern der Alten, Vierter Theil, darinn sechs neue deutsche Stücke enthalten sind, nebst einer Fortsetzung des Verzeichnisses deutscher Schauspiele, ans Licht gestellt von Joh. Christoph Gottscheden. 1743; Die Deutsche Schaubühne nach den Regeln und Mustern der Alten, fünfter Theil, darinn sechs neue deutsche Stücke enthalten sind, nebst einer Fortsetzung des Verzeichnisses deutscher Schauspiele, ans Licht gestellt von Joh. Christoph Gottscheden. 1744; Der Deutschen Schaubühne nach den Regeln und Mustern der Alten, Sechster und letzter Theil, darinn sechs neue deutsche Stücke enthalten sind, ans Licht gestellt von Johann Christoph Gottscheden. 1745
- ³¹ Die Deutsche Schaubühne nach den Regeln und Exempeln der Alten, Erster Theil, nebst einer Vorrede, und des Erzbischofs von Fenelon Gedanken von der Tragödie und Comödie ans Licht gestellet von Joh. Christoph Gottscheden. 1742
- ³² Konrad Seeliger: Johann Elias Schlegel. In: *Mittheilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Meißen*. Zweiter Band. 1891, S.188
- ³³ Theodor Wilhelm Danzel: *Gottsched und seine Zeit*. 1848, S.146
- ³⁴ Johannes Crüger: Briefe Joh. Schlegels an Bodmer. In: *Archiv für Literaturgeschichte*. Bd.14. 1886, S.51 vgl. Johann Elias Schlegels *aesthetische und dramaturgische Schriften*. (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts in Neudrucken. Bd.26) 1887, S.XV (Johann von Antoniewicz による導入部分)
- ³⁵ Gotthold Friedrich Stäudlin(Hg.): *Briefe berühmter und edler Deutschen an Bodmer*. 1794, S.43
- ³⁶ Die Deutsche Schaubühne, Erster Theil. 1742, S.7
- ³⁷ *ibid.* S.21
- ³⁸ Joh. Elias Schlegels Werke. Erster Theil herausgegeben von Johann Heinrich Schlegeln Professor der Philosophie bey der Universität Kopenhagen und Secretair der Königlich Dänischen Kanzley. 1761, S.387 この文章はこのあと次のように続く。「それから長い時間が過ぎて当初の目的が失われ、訳稿執筆者が自身の演劇作品集に一つの場所を予定した時には、手元を離れていたことと時間が短かったこともあって、『新論叢 (Neue Beyträge)』の執筆者をしている友人たちに、自分自身にもほとんど馴染みのないものになっていたこの仕事の批評を頼むしかなかった。しかしながら、彼らも大半がまさにこの時期にライプツィヒを離れたので、彼らは訳者からの求めを満たすためには、彼らのなかの一人にその任を委ねることしかできなかった。その人は、翻訳をギリシア語の原文と突き合わせたのち、たしかにそれを仕上げた時期にしてはとてもよい翻訳だが、しかし読者は今ならもっと完璧な仕事を訳者に期待する、という判断を下した。訳者は日頃から自身に厳しかったので、この判断は、エレクトラは演劇作品集に入れないことにしたとライプツィヒに書いて送るのに行動の理由としては十分なものだった。だが、その人の手紙が着くのが遅すぎて、すでに部分的に印刷してしまっていた。」 *ibid.* S.387f.
- ³⁹ Johann Elias Schlegels Werke. Fünfter Theil nebst dem Leben des Verfassers herausgegeben von Johann Heinrich Schlegeln Professor der Philosophie bey der Universität Kopenhagen und Secretär der königlich-dänischen Kanzley. 1770, S.XXI
- ⁴⁰ Johann Elias Schlegels *aesthetische und dramaturgische Schriften*. (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts in Neudrucken. Bd.26) 1887, S.XV
- ⁴¹ a.a.O. S.XXII
- ⁴² Elizabeth M. Wilkinson: Some Unpublished Letters from the Correspondence of Johann Elias Schlegel. In: *The Modern Language Review*. Vol. 34, No. 3 (Jul., 1939), p.402
- ⁴³ *Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*, herausgegeben von Einigen Mitgliedern der Deutschen Gesellschaft in Leipzig. Bd.2. 1733, S.152-168
- ⁴⁴ *Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*. Bd.5. 1737, S.89-108
- ⁴⁵ *Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*. Bd.5. 1738, S.328-340 ピューラの『アエネーイス』の試訳をめぐっては、以下の論文を参照のこと。福田覚「ピューラの『アエネーイス』訳の掲載をめぐってーゴットシェートとの関係を語る一つの挿話」、『希土』第41号、2016年、29-57頁
- ⁴⁶ *Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*. Bd.6. 1740, S.466-485
- ⁴⁷ *ibid.* S.624-651 この文章はのちに弟のヨハン・ハインリヒ・シュレーゲルによって『作品集』に再録された。vgl. Joh. Elias Schlegels Werke. Dritter Theil herausgegeben von Johann Heinrich Schlegeln Professor der Philosophie bey der Universität Kopenhagen, und Secretair der Königlich Dänischen Kanzley. 1764, S.65-94
- ⁴⁸ *Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*. Bd.7. 1741, S.647-656
- ⁴⁹ Joh. Elias Schlegels Werke. Dritter Theil. 1764, S.203-212
- ⁵⁰ *ibid.* S.206

- ⁵¹ Johann Elias Schlegels Werke. Fünfter Theil. 1770, S.XIII
- ⁵² Johann Elias Schlegels aesthetische und dramaturgische Schriften. (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts in Neudrucken. Bd.26) 1887, S.XVI Anm.2)
- ⁵³ アントニー・ヴィチは、のちにウイルキンソンが明らかにする父親宛の手紙のことはまだ知らないが、「手紙の抜粋」の手紙が書かれたのは、先の「8年以上前」というヨハン・ハインリヒ・シュレーゲルの言葉を手がかりに、1739年の4月から9月の間と推定していた。vgl. *ibid.*
- ⁵⁴ Joh. Elias Schlegels Werke. Erster Theil. 1761, S.389
- ⁵⁵ a.a.O. S.201
- ⁵⁶ Johann von Antoniewicz: „Schlegel, Johann Elias“, in: Allgemeine Deutsche Biographie 31(1890), S. 378-384 [Online-Version]; URL: <https://www.deutsche-biographie.de/gnd118608002.html#adbcontent>
- ⁵⁷ *ibid.*
- ⁵⁸ Johann Christoph Gottsched: Versuch einer critischen Dichtkunst. Anderer besonderer Theil. In: Ausgewählte Werke, Bd. VI/2, hrsg. v. Joachim Birke und Brigitte Birke. 1973, S.309-335(Von Tragödien oder Trauerspielen), 337-360(Von Comödien oder Lustspielen) このゴットシェート選集の『批判的詩論』は、基本的に、第3版(=C)に基づいている。ただし、それ以外の版(A,B,D)に基づいて第3版と異なる表記に修正している箇所もある。Vgl. Johann Christoph Gottsched: Versuch einer critischen Dichtkunst. Variantenverzeichnis. Bd. VI/3, hrsg. v. Joachim Birke und Brigitte Birke. 1973, S.128-134
- ⁵⁹ *ibid.* S.312
- ⁶⁰ *ibid.* S.312f.
- ⁶¹ アリストテレス「詩学」、『アリストテレス 詩学・ホラーティウス 詩論』(松本仁助、岡道男 訳) 所収、岩波文庫、1997年、51頁以下
- ⁶² 同書、52頁
- ⁶³ 同前
- ⁶⁴ 同書、53頁
- ⁶⁵ a.a.O. S.313
- ⁶⁶ *ibid.* S.313f.
- ⁶⁷ *ibid.* S.314
- ⁶⁸ 當津武彦『アリストテレス『詩学』の研究(上)』、1999年; 同『アリストテレス『詩学』の研究(下)』、2000年
- ⁶⁹ 當津『アリストテレス『詩学』の研究(下)』、95頁以下
- ⁷⁰ 同書、107頁以下
- ⁷¹ 同書、108頁
- ⁷² 同書、97頁
- ⁷³ Wolfgang Bernard: Das Ende des Ödipus bei Sophokles. Untersuchungen zur Interpretation des 'Ödipus auf Kolonos'. 2001
- ⁷⁴ *ibid.* S.247
- ⁷⁵ *ibid.* S.114
- ⁷⁶ *ibid.* S.85
- ⁷⁷ *ibid.* S.247
- ⁷⁸ *ibid.* S.32
- ⁷⁹ *ibid.* S.247
- ⁸⁰ *ibid.* S.247 Anm.23
- ⁸¹ *ibid.* S.248
- ⁸² a.a.O. 241f. 歴史家テオドア・モムゼンの弟である文献学者テュヒョー・モムゼンは、「複製」を、異国の内容には忠実だが形式はそうではない再現の場合、ドイツ的な内容を異国の形式で表現する場合、内容も形式もできる限り忠実でしかも美しく分かりやすい形で訳す場合という3つの場合に分け、そのうち「翻訳」に当たる2つの場合について、第一のタイプを「様式なき翻訳」、第三のタイプを「厳格な翻訳」または「様式的翻訳」と呼んでいた。そして、「様式なき翻訳」の例として、17世紀のオーピッツによるソフォクレスとセネカの翻訳を挙げていた。Tycho Mommsen: Die Kunst des deutschen Uebersetzers aus neueren Sprachen. 1858, S.8, 10-11 Vgl. Josefine Kitzbichler, Katja Lubitz, Nina Mindt: Theorie der Übersetzung antiker Literatur in Deutschland seit 1800. 2009, S.163f.
- ⁸³ Mart. Opatii Opera Poetica. Das ist Geistliche vnd Weltliche Poemata 1646, S.165 (1936年のテキストも同じだが、そちらの献辞にはページ番号がない。) ラテン語の文の意味については、次の文献を参照した。Michael von Albrecht: Wort und Wandlung. Senecas Lebenskunst. 2004 S.199
- ⁸⁴ *ibid.*
- ⁸⁵ L. Annaei Senecae Trojanerinnen; Deutsch übersetzt und mit leichter Auflegung erklert durch Martinum Opatium. 1625

⁸⁶ a.a.O. S.210-300

⁸⁷ von Albrecht, a.a.O.

⁸⁸ Beiträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit, herausgegeben von Einigen Mitgliedern der Deutschen Gesellschaft in Leipzig. Bd.1. 1732, S.1f.

⁸⁹ ibid. S.40

⁹⁰ Mart. Opitii Opera Poetica. Das ist Geistliche vnd Weltliche Poemata. 1646, S.213 (1925 年のテキストも同じだが、そちらにはページ番号がない。)

⁹¹ ibid. S.212f.

⁹² 三十年戦争時代を生きる読者に向けた慰めとしてのオーピッツの詩という主題については、以下の論考を参照のこと。永谷益朗「詩的世界の共同性とレトリックの戦略ーオーピッツ『戦争の災厄を慰める詩』、『独文学報』21号、2005年、5-31頁

⁹³ Mart. Opitii Opera Poetica. 1646, S.213

⁹⁴ そうした考察の一例としては、以下の論文を参照のこと。福田寛「ピューラの崇高論と詩学史を構成する物語ーロンギノスの受容、スイス派との関わり」、『希土』40号、2015年、57-79頁

⁹⁵ Johann Elias Schlegels aesthetische und dramaturgische Schriften. (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts in Neudrucken. Bd.26) 1887, S.XIV Anm.2)

⁹⁶ Danzel a.a.O, S.145f.

⁹⁷ ゴットシェートはマントイフェル伯宛の 1738 年 5 月 31 日付けの手紙でこう書いている。「私は、ドイツ語からすべての押韻を排すべきだという考えでは決してありません。古代の詩人や外国の詩人を翻訳するときのみ、そこではそうでなくても沢山縛られることがありますから、当然のこととして、押韻しない形で表される特権があるべきではないか、と考えております。」Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched. Band 5: 1738–Juni 1739. Hrsg. und bearb. von Detlef Döring, Rüdiger Otto und Michael Schlott unter Mitarbeit von Franziska Menzel. 2011, S.134